を歩く会　７月定例会「夏季研修会」資料

織豊系石垣城の傑作竹田城
２０周年記念一泊旅行の見どころ

平成２６―７―２５　山岸弘明

０月定例会　２０周年記念一泊旅行主要行程

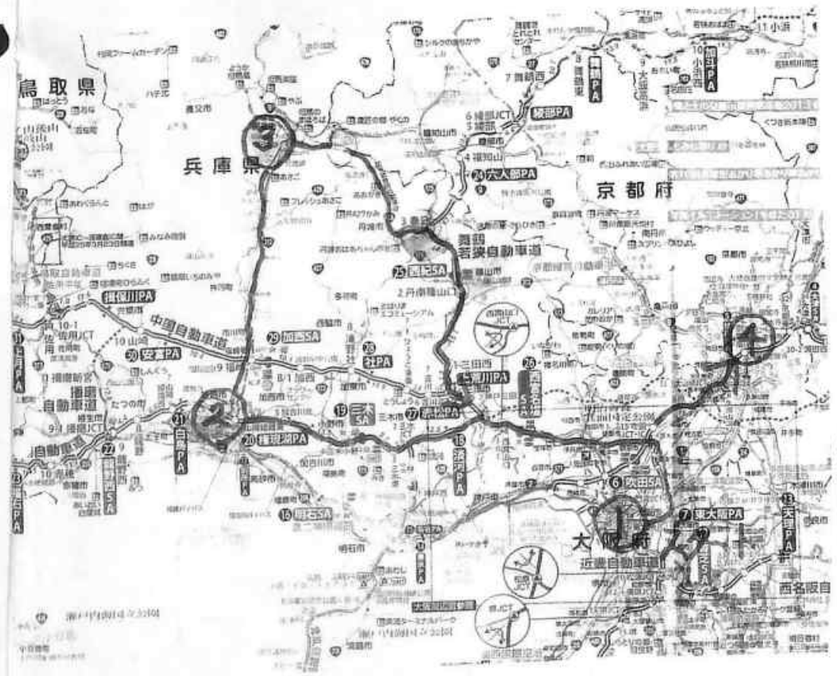
第１日（１０月８日＝水曜日）

	東京７時０３分発「ひかり４６１号」または
	７時３０分発「のぞみ３１１号」乗車
	新大阪１０時０３、１０時００分到着
１０時２０分	東海道新幹線新大阪駅集合、貸し切りバス出発
１１時００分～１３時００分	大坂城
	移動、車中昼食
１５時００分～１７時００分	姫路城
１７時３０分	「ホテル姫路プラザ」着、宴会、宿泊

第２日（１０月９日＝木曜日）

８時００分　6:40～朝食	ホテル出発
９時３０分～１１時３０分	竹田城、マイクロバス分乗
	移動、車中昼食
１３時４５分	京都市内見学（豊国神社、方広寺など）
１５時００分～１６時００分	京都御所
１７時３０分	京都駅解散　18:?

お断り＝内容の一部を変更することがあります



城郭ファンとしては「天空の城」ではない「織豊系を代表する総石垣の名城」を楽しもう

59 姫路城（ひめじじょう）

白鷺にたとえられる世界遺産の白亜の城

●南西から見た天守群
右から大天守、西小天守、乾（いぬい）小天守。大天守の後ろに隠れて東小天守があり、これらを渡櫓で連結した天守群は実にすぐれた構成美を形成している。

主な道構と見どころ

●天守群、櫓・門多数、本丸、二の丸、西の丸、三の丸、石垣、堀
●姫路城の見どころは数多いが、まずは天守群の美しさと縄張の複雑さをあげてよいだろう。菱の門、「は」の門、備前丸、井戸曲輪、西の丸などから見た天守群の姿がすべて異なることに注目しながらの城内巡りが楽しい

別名	白鷺城［はくろじょう］
所在地	〒670-0012　兵庫県姫路市本町 68
連絡先電話	079-285-1146
城地種類	平山城
築城年代	天正８年（1580）、慶長６年（1601）
築城者	羽柴（豊臣）秀吉、池田輝政
主要城主	豊臣氏、池田氏、本多氏、松平(奥平)氏、松平(越前)氏、榊原氏、酒井氏
文化財史跡区分	国指定特別史跡、国宝８件（大天守、東・西・乾小天守、イ・ロ・ハ・二の渡櫓）、重要文化財 74 件
近年の主な復元・整備	－
天守の現況・形態	望楼型　五重六階地下一階　木造（現存）
主な関連施設	兵庫県立歴史博物館、姫路城西御屋敷跡庭園「好古園」
追記	兵庫県立歴史博物館では、城に関しては「城と城下町」の常設展示があり、姫路城および城郭研究に関する情報や研究成果などが紹介されている

今研修会で保科講師が紹介

54 大阪城（おおさかじょう）（豊臣大坂城）

豊臣と徳川が築いた天下人の大城郭

●北東側から見た石垣と水堀
いくつもの屈曲をそなえた石垣と２重に囲まれた広大な水堀が往時の姿をよく残している。城跡は史跡公園・大阪城公園となって人々に親しまれている。

主な道構と見どころ

●千貫櫓、乾櫓、一番櫓、六番櫓、金蔵、焔硝蔵、本丸、二の丸、石垣、堀
●本丸や二の丸を巡る長大な石垣と水堀はいかにも将軍家の城にふさわしい眺めである。特に二の丸南側に屈曲しながら長く続く石垣は圧巻の一言。大手門・桜門・京橋門跡の巨石も見事である

別名	錦城、金城
所在地	〒540-0002　大阪府大阪市中央区大阪城 1-1
連絡先電話	06-6941-3044（大阪城天守閣）
城地種類	平山城
築城年代	天正 11 年（1583）、元和６年（1620）
築城者	豊臣秀吉、徳川幕府
主要城主	豊臣氏、松平氏、徳川氏
文化財史跡区分	国指定特別史跡、重要文化財 13 件
近年の主な復元・整備	平成７～９年に天守閣改修
天守の現況・形態	望楼型　五重八階　鉄骨鉄筋コンクリート造
主な関連施設	－
追記	－

２月の研修会で紹介

竹田城

京都御所

豊国神社

方広寺

3

プロローグは「織田信長、豊臣秀吉の天下一統」

1）中世と近世の架け橋ーーその時代

①中世＝前期武家政権

治承３年１１７９　平清盛＝太政大臣、後白河法皇を幽閉、平氏政権樹立
文治元年１１８５　源頼朝＝平氏滅亡させ鎌倉幕府成立、源氏３代、北条執権時代
元弘３年１３３３　後醍醐天皇＝鎌倉幕府を倒し、建武の新政を敷く
延元元年、建武３年１３３６　足利尊氏＝征夷大将軍に就任、室町幕府を開く
永享１０年１４３８　足利６代義教＝鎌倉府、永享の乱で関東の大乱始まる
応仁元年１４６７　足利８代義政＝後継争いから応仁の乱始まる、全国で戦国時代に突入
天正元年１５７３　１５代義昭＝信長に降伏、室町幕府滅亡

②中世（教科書は近世とする）＝安土桃山時代、織田信長の天下統一事業

天正元年１５７３　信長「天下布武」へ前進
　　１５６８足利義昭を奉じて上洛、１５７３義昭を廃す
　　１５７１延暦寺焼き討ち、１５７５長篠の戦い
〃　５年１５７７　信長安土城に移り、楽市、楽座の制布く
〃　１０年１５８２　信長本能寺の変で明智光秀に殺害される

③中世（　〃　）＝安土桃山時代、豊臣秀吉、信長の夢引き継ぎ天下統一

お断り＝本稿では木下、羽柴時代も豊臣秀吉とした
天正１０年１５８２　秀吉山崎の戦いで光秀を破り、信長後継者となる
〃　１３年１５８５　秀吉四国平定
〃　１４年１５８６　秀吉太政大臣に任じられ、豊臣姓を与えられる
〃　１５年１５８７　秀吉九州平定
〃　１８年１５９０　秀吉小田原征伐で関東を平定、奥州服従、全国統一なる
文禄７年１５９８　秀吉没、幼い秀頼が豊臣家を継承
慶長５年１６００　関が原の合戦で徳川家康勝利

織田信長の統一事業 137

詳日 第6章1 p.149 ～ 151

1 織田信長の統一関係年表

将軍	年	事項
足利義輝	1534	尾張那古屋に生まれる
	1551	父信秀の死去により家督を継ぐ(18歳)
	1560	5 桶狭間の戦い❶。今川義元を倒す
	1565	5 三好義継・松永久秀ら，将軍足利義輝を殺す
	1566	8 足利義昭から幕府権威回復の命をうける
	1567	8 稲葉山城の戦い。斎藤竜興の稲葉山城を落とし，同城に移り，岐阜と改名(34歳)❷
義栄	1568	9 足利義昭を奉じて入京❸
義昭		10 足利義昭，征夷大将軍となる
	1570	6 姉川の戦い❹。浅井長政・朝倉義景を破る
		9 石山戦争，はじまる(～80)❺
	1571	9 比叡山延暦寺を焼打ち(38歳)❻
	1572	12 三方ヶ原の戦い。武田信玄，徳川家康を破る
	1573	7 足利義昭を追放。室町幕府滅亡❼
	1574	9 伊勢長島の一向一揆を鎮圧❽
	1575	5 長篠合戦❾。武田勝頼を破る
		8 越前の一向一揆を鎮圧
	1576	2 安土城築城(79年完成)❿
	1577	2 安土城を居城とする
		3 根来・雑賀の一向一揆を鎮圧⓫
		6 安土城下を楽市とする 4-② 4-③
		10 羽柴秀吉，中国攻め開始(～82)⓬
	1580	3 石山戦争，終結。顕如と和睦
	1582	3 天目山の戦い。武田勝頼敗死⓭
		5 羽柴秀吉，備中高松城を水攻め
		6 本能寺の変。明智光秀に襲われ敗死(49歳)

◎◎織田信長(1534～82，左)と「天下布武」の印(下)　尾張の守護代の一族に生まれ，1560年桶狭間の戦いで今川氏を破って統一事業を進め，1567年の美濃征服後は「天下布武」の印判を用いた。1582年に本能寺の変で敗死。

2 信長の政策

特色	伝統的な政治や経済の秩序・権威を克服し，新しい支配体制をつくることをめざす
政策	
都市	・堺を直轄領とし，畿内の経済力を掌握(堺の商人より矢銭２万貫を集める) ・楽市令により自由な商業活動を促す(1567年美濃加納，1577年安土山下) 4-③
通貨	・撰銭令を出し，貨幣間の交換比率を定め撰銭を制限した(1569)
交通	・関所を撤廃し，商品流通を盛んにする(1568)
宗教	・仏教勢力の弾圧(1571年延暦寺焼打ち，石山戦争で一向一揆を屈服させる)
朝廷	・献金(1568)，御所建築(1670)

3 織田氏関係略系図

- 信広――女(丹羽長秀室)
- 信長
  - 信忠―秀信(三法師)
  - 信雄(北畠具教養子)
  - 信孝(神戸具盛養子)
  - 秀勝(豊臣秀吉養子)
  - 五徳(松平信康室)
- 信行
- 信包
- 信時
- 信興
- 信定―信秀
- 長益(有楽斎)
- 浅井長政 ＝ いち ＝ 柴田勝家
  - 万福丸
  - 茶々(淀殿，豊臣秀吉室)
  - 初(京極高次室)
  - 江(お江与，徳川秀忠室)

4 信長の統一事業

◎安土城復元(内藤昌氏復元)　5層7重の大天守を持つ安土城は，1579年，標高199mの安土山に完成。最上階は金の瓦に金の柱が施され，内部の障壁画は狩野永徳らが手がけた。

4

4-① 信長の統一事業要図

❶ 桶狭間の戦い(1560)

❷ 稲葉山城の戦い(1567)

戦いに勝ち，岐阜を居城とする。

❸ 足利義昭を奉じて入京(1568)

❹ 姉川の戦い(1570)

◎浅井長政(1545～73)
近江の戦国大名。夫人の市は信長の妹。姉川の戦いに敗れ，1573年自刃。

◎朝倉義景(1533～73)
越前の戦国大名。姉川の戦いに敗れ，1573年滅びる。

❻ 延暦寺焼打ち(1571)

❼ 室町幕府滅亡(1573)

将軍義昭を追放。

❽ 伊勢長島の一向一揆鎮圧(1574)

❾ 長篠合戦(1575)

1575年織田・徳川連合軍は，鉄砲隊の威力で武田軍の騎馬隊を破った。

▶長篠合戦図屏風

❿ 安土城築城(1576～79)

⓫ 根来・雑賀の一向一揆鎮圧(1577)

信長の領土拡張
- 1560年(桶狭間の戦い)頃
- 1572年(三方ヶ原の戦い)頃
- 1575年(長篠合戦)頃
- 1581年頃
- 1582年(武田家旧領を併合)頃

⓬ 中国攻め(1577～82)

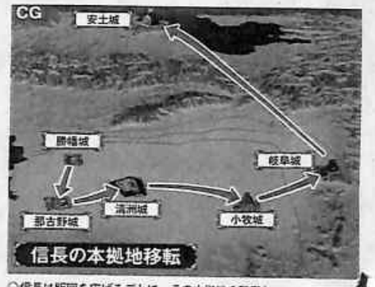
⓭ 天目山の戦い(1582)

▶武田勝頼(1546～82)
武田信玄の子。長篠合戦で大敗後，1582年，天目山の戦いに敗れて自刃。

⓮ 石山戦争(1570～80)

▶顕如(光佐)(1543～92)
本願寺11世。1570～80年に信長と石山戦争を展開，のち京都に寺地を得た。

▶一向一揆の軍旗
「進むは往生極楽，退くは无(無)間地獄」と記され，石山戦争に加わった門徒の軍旗。



◎信長は版図を広げるごとに，その本拠地を移動しつづけた。生まれ育った尾張の勝幡城から天下布武を目前とした安土城まで，その変遷を辿ってみた。

4-③ 安土城下町

◀解説
安土は水陸交通の要衝であり，信長は1577年，安土山下町に楽市令を出した。信長は，中山道の商人の通行を止めて下街道(中山道から分かれ，琵琶湖沿いに北上する道で，朝鮮人街道ともよばれた)を通らせ，商業の安土への集中をはかろうとした。

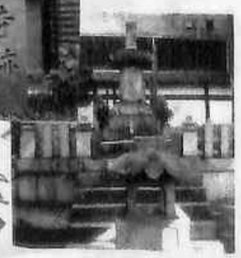
城名(所在地)	築城年	遷地	標高	比高	信長築城	城郭の構造	利用形態	備考
勝幡城		平城	六m	〇m			居城	父信秀の居城で誕生
那古野城	天文六年頃	平城	十四m	二m			居城	父信秀が信長を配す
清洲城	天文二四年	館	三四・五m	一五m			居城	尾張守護所を居城
二宮山(計画)	永禄五年頃	山城	二九三m	二六〇m	〇	〇		
小牧山城	永禄六年	丘城	七五m	五五m	〇	〇	居城	室町期の城を改築
岐阜城	永禄十～十二年	山城	三三八m	二九五m	〇	〇	居城	将軍の室町御所として
足利義昭室町第	永禄十二年	館	四六m	〇m				
宇佐山城	森土平・森蘭丸	山城	三三五m	二三二m	〇	〇	城代警固	森可成を置く
勝軍山城	柴田勝家・丹羽長秀	山城	三〇一m	二九三m	〇		城代警固	兄信広を置く
横山城	元亀元年	山城	三一二m	二六〇m	〇		付城	小谷城の出城を城攻め付城に改築
虎後前山城	元亀元年	山城	二二四m	二二九m			付城	小谷城の付城，麓に長塁を構築
山王山(計画)	元亀三年	山城	三八一m	二七九m	〇			
武者小路邸	天正元年	屋敷	四八m	〇m		〇		
吉田山(計画)	天正二年	山城	二三二m	一六m	〇		宿城	在京の宿城として，完成前に破却
佐和山城	天正二年	山城	二三二m	一四五m				
北之庄城	天正三年	平城	七m	〇m			城代警固	信長の築城，柴田勝家を置く
安土城	天正四～九年	山城	一九六m	一〇六m	〇		居城	天正九年秋に竣工
二条城	天正四年～六年	屋敷	四三m	〇m				竣工後誠仁親王に献上
山崎陣所	天正七年	山城か	二七〇m	二四〇m	〇		宿城	
古池田城	天正七年	丘城	五五m	二五m			陣城	摂津・大和方面出陣時の陣城
勝龍寺城	天正九年	平城	二〇m	二m		〇	城代警固	摂津統一の拠点，のち中国攻めの基地
天王寺取出	天正二～八年	平城	一八m	二～三m	〇	〇	城代警固	細川藤孝丹後移動後，信長の直轄とする
大坂城	天正八年～	丘城	三二m	一九	〇	〇	城代警固	一〇余城あった本願寺への付城の中心

将来の居城として着手

織田信長の築城

安土城 ←

本能寺跡 ←



本能寺の信長の墓 →

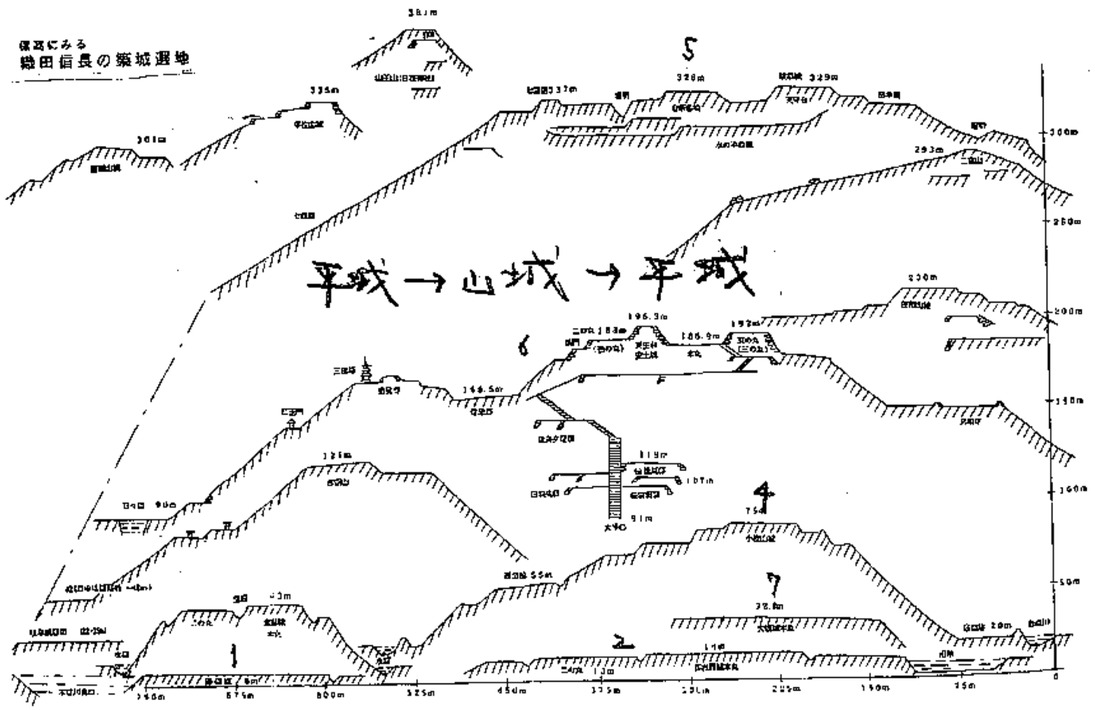
④近世＝後期武家政権、江戸時代はじまる
慶長８年１６０３　家康征夷大将軍に就任。江戸幕府成立
〃　１０年１６０５　家康隠居、徳川秀忠２代将軍就任。世襲はじまる
〃　１９年１６１４　家康大坂冬の陣、翌元和元年夏の陣で豊臣氏を滅亡させる

２）安土城、大坂城、そして江戸城――信長、秀吉「天下布武の城」から家康「天下の覇城」

①織田信長の居城変遷（平城→山城→平城）
1 勝幡城＝天文３年父信秀居城で誕生
2 那古野城（名古屋）＝天文６年信秀、信長を配す
3 清洲城＝天文２４年守護代織田家を倒して移り、尾張１国を支配
4 小牧山城＝永禄６年岐阜攻撃拠点として城下ごと移す
5 岐阜城＝永禄１０年斉藤氏の稲葉山城を落とし、大改修して移る
6 安土城＝天正４年「天下布武」の拠点として築城開始、国内初の本格的天守出現、近世城下町はじまるが信長の死でわずか１０年で終わる
7 大坂城＝天正１０年次期居城として築城工事を開始、未完の城は秀吉に引き継がれる

②豊臣秀吉の居城変遷
小谷城＝天正元年信長から北近江１２万石を与えられる
長浜城＝天正２年築城
姫路城＝天正８年信長軍団長として播磨を制圧した時、黒田孝高から献じられ移る。近世城郭に改造（大河ドラマ軍師官兵衛）
大坂城＝天正１１年信長を後継、大坂城を完成させて移る。ここを本拠に天下を平定
伏見城＝文禄３年築城、晩年の居城、慶長３年城内で逝去

③徳川家康の居城変遷
三河岡崎城＝天文１１年誕生、織田、今川氏人質生活、永禄元年今川義元の死で復帰
遠江浜松城＝元亀元年武田信玄と協定、領国拡大にともない進出
駿河駿府城＝天正１４年秀吉に臣礼を取り移る
江戸城＝天正１８年秀吉小田原征伐勝利で関東へ移封。関が原の合戦勝利で江戸幕府開設
駿府城＝慶長１２年、征夷大将軍を秀忠に譲位して隠退。元和４年当地で逝去



３）丹羽長秀、黒田官兵衛、藤堂高虎――近世城郭の系譜

①織田信長の城作り
縄張り＝奉行人・丹羽長秀
ゼネコン化職人集団、分業、専門職
番匠（大工頭）岡部又左衛門父子、熱田神宮宮大工
石切り、石工集団。近江、馬淵、岩倉、穴太
瓦職人、屋根葺き、大鋸（おが）引き、鍛冶、桶結び、畳

②豊臣秀吉の城作り
縄張り＝豊臣秀吉、黒田官兵衛

③徳川家康の城作り
縄張り＝藤堂高虎。丹羽流継承者、技術集団引き継ぐ
慶長の「築城ラッシュ」　最盛期を迎える
「天下普請」と豊臣包囲網
「一国一城令」による築城制限

④城の終焉
明治６年「城郭存廃令」

４）高石垣、瓦、礎石建物――織豊系城郭とその特徴

①織豊系城郭とは＝織田、豊臣政権下に築かれた城郭をいう。
戦国時代の城は土を掘り積み上げた戦闘施設としての山城であったのに対して、織田信長の安土城に始まる織豊系城郭は領内統治と権勢誇示を目的とした見せるための城（近世的平山城、平城）であった。

②最大の特徴は高石垣、瓦、礎石建造物にある。

③石垣の高さ＝戦国期１～２m→織豊期５m以上に。（江戸初期最盛期は１０～２０m）
石材＝人頭大自然石、あら割り石→矢穴による切り石へ。長辺１m超の大石が可能に
石積み＝野づら積み→打ち込みハギ（間詰め石の活用）（江戸初期切り込みハギに進化）
初期の算木組はじまる＝すっきりコーナー。隅部の強化で高石垣、高重建造物が可能に

④金箔瓦＝はじめ権威の象徴として織田一門のみ。秀吉時代に全国の大大名に広がる。

⑤礎石建造物＝高層天守が登場する。

⑥織豊系城郭は全国に数１００城規模で築城されたが、江戸時代に継続使用された城の多くはその後大改修された。一方、「元和一国一城令」などで廃城となったものには当時の面影をそっくり伝えているものが多く、竹田城はその代表的な遺跡である。

⑦今回見学する３城はいずれも織豊系城郭で、姫路城は秀吉が出世城として改修、天守は後代池田輝政築城だが三国堀、本丸石垣などに秀吉時代の遺構が確認できる。

⑧大坂城は信長、秀吉２代の総結集であったが、大坂夏の陣ですべてが焼き払われ、石垣も徳川秀忠によって埋没された。地表には石材一個も存在しないが地中深く保存されているといえる。

５）安土城、小田原石垣山一夜城、太田金山城――会がこれまでに案内したおもな織豊系城郭

①東北地方の城
白石城、若松城、＊二本松城、＊猪苗代城、＊神指城

②関東地方の城
＊唐沢山城、＊太田金山城、＊笠間城、＊箕輪城、沼田城、宇都宮城
江戸城、館山城、＊小田原古城、＊石垣山一夜城、＊山中城、八王子城

③甲信越地方の城
＊新府城、甲府城、上田城、小諸城、松本城、松代城
＊越後福島城、＊北の庄城

④東海、近畿地方の城
＊岐阜城、清洲城、駿府城、掛川城、浜松城、那古野城、＊安土城、姫路城

7

138 豊臣秀吉の全国統一

詳日 第6章1 p.151～152

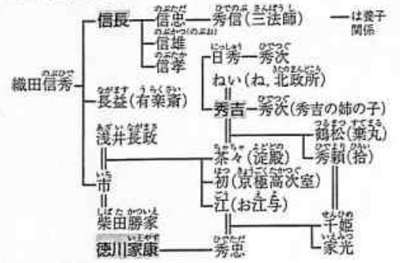
1 豊臣秀吉の全国統一関係年表

- 1582（天正10）
  - 6 本能寺の変。毛利輝元と和睦❶
  - 山崎の合戦（明智光秀，滅亡）❷。清洲会議❸
  - 7 太閤検地を開始（～98）
- 1583（天正11）
  - 4 賤ヶ岳の戦い（柴田勝家，敗死）❹
  - 8 大坂城築城開始（～88）❺ 5
- 1584
  - 4 小牧・長久手の戦い（織田信雄・家康と和睦）❻
- 1585（天正13）
  - 7 紀伊平定❼。関白となる。四国平定（長宗我部元親，降伏）❽。九州に惣無事令
- 1586
  - 12 太政大臣となり，豊臣の姓を賜る
- 1587（天正15）
  - 5 九州平定（島津義久，降伏）❾
  - 6 バテレン追放令❿
- 1588
  - 7 刀狩令，海賊取締令
- 1590（天正18）
  - 7 小田原攻め（北条氏政，滅亡）⓫
  - 奥州平定（伊達政宗を服属，全国統一）⓬

◀豊臣秀吉（1537～98）尾張中村に地侍木下弥右衛門の子として誕生。今川氏の武将に仕え，のち織田信長に仕え，羽柴秀吉と名乗って近江長浜に居城。本能寺の変後に全国を統一し，太閤検地や刀狩などをおこなった。後陽成天皇より豊臣の姓を賜る。朝鮮侵略をおこない，1598年，病没。

◀秀吉の馬印である千成瓢箪(左)と兜(右)

2 秀吉関係略系図



3 山崎の合戦関係図

4 秀吉の全国統一関係図

5 大坂城

▲現在の大阪城(上)とモンタヌスの大坂城(下)
石山本願寺の跡地に，秀吉が1583年に築城。現在の天守は1931年に復興。下はモンタヌス編『東インド会社遣日使節紀行』にある大坂城の鳥瞰図(記録をもとに描いた想像図)。

6 聚楽第

▲聚楽第（『聚楽第図屏風』） 秀吉が内裏跡に造営した城郭風の邸宅。1588年，後陽成天皇の行幸をあおいだ。1586年，秀吉は天皇より太政大臣に任じられ，豊臣の姓を賜った。

7 豊臣政権の財政的基盤

①220万石をこえる直轄地＝蔵入地（66カ国総石高1857万石余のうち）……蔵入地の70％は畿内とその近国に集中
②主要な鉱山を直轄……佐渡（金山）・石見大森（銀山）・但馬生野（銀山）
③天正大判などの貨幣を鋳造（京都の金工後藤徳乗に命じる）
④重要都市の直轄……京都・大坂・堺・伏見・長崎など
⑤豪商の経済力を掌握……堺の千利休・小西隆左（行長の父），博多の島井宗室・神屋宗湛ら

8 政治組織

五大老	五奉行	担当
徳川家康	浅野長政	検地
前田利家	石田三成	内政
宇喜多秀家	増田長盛	検地
毛利輝元	長束正家	財政
小早川隆景	前田玄以	京都市政
上杉景勝		

※小早川隆景の死後から五大老とよばれた

8

圧倒的なスケールの石垣群が累々と連なる

1）赤松広秀が築いた「織豊系総石垣」の傑作――竹田城のあゆみ

①室町中期、永享３年～嘉吉３年、但馬守護代山名氏重臣太田垣氏築城とされる。
（典型的な中世土の山城＝山頂主郭中心に曲輪連ねる、土塁、空堀、立て掘、堀切り）
②天正５～６年にかけての信長但馬進攻で豊臣秀吉軍の弟秀長が攻め落とす。（大河ドラマ）
③天正６年秀長、ついで秀長の武将・桑山重晴が居城とする。
④天正１３年からの１５年間赤松広秀に与えられる。石垣城跡は広秀築城とされるが２万石の自力では至難なことから秀長の関わりと秀吉の支援が考えられる。慶長５年関が原の合戦で西軍に与して改易、廃城、しかしほとんど「城割り」されずそのまま放置された。
⑤但馬地方の出石城主小出吉秀、豊岡城主杉原長房、八木城主別所吉治とともに西軍に属し、家康方の田辺城細川藤孝を攻略した。広秀は関が原の東軍勝利を見極めて今度は西軍の鳥取城を攻めたが、家康は許さず切腹を命じた。

2）４００ｍの塁壁に広がる穴太積み――竹田城の縄張り

①主郭は本丸標高３５３ｍ、各曲輪に２０ｍの高低差がある。山城と１００ｍほど下の山麓居館、根小屋集落からなる。歩いて４０分の急坂を別チャーターのマイクロバスに分乗する。
②主郭は頂上に本丸を置き、南、北、西三方に広がる尾根上に立地し、南北４００ｍ東西１００ｍの「人」文字を形成する。
③大手虎口は北側尾根（北千畳敷曲輪）で、北千帖、３の丸、２の丸の順に並んでいる。南側尾根（南千畳敷曲輪）は虎口、南千帖、南２の丸の順、西側尾根（花屋敷曲輪）はからめて花屋敷（花殿）になっている。
④それぞれの曲輪は広く、石垣や枡形虎口で分断し、中世土の城遺構は地上に存在しない。全体のレイアウトは大胆で、大手、武の門、２の丸と続く虎口はそれぞれ櫓台による強烈な横矢や登り坂、複雑な迂回など防御のしくみがくみ取れる。
⑤石垣は高さ５～１０ｍ、本丸、天守を頂点とする三角形急ガケ上におよそ４００ｍ連なり、強

播磨・丹波からの但馬進攻路
喉口ともいえる防御ポイント

国史跡 竹田城跡

全国屈指の山城遺構

歴史

嘉吉元年（1441）、嘉吉の乱勃発後、山名氏と赤松氏の間に深刻な対立が生じていました。竹田城はこの時、赤松氏に対する山名氏方の最前線基地のひとつとして築城されました。以後、太田垣氏7代にわたり城主となりますが、天正5年（1577）、羽柴秀吉（豊臣）秀吉の但馬攻めにより、羽柴秀長が城代となりました。これ以降、竹田城は織豊方の拠点城郭として機能しました。

天正8年（1580）、羽柴秀長は出石・有子山城に入り、その後、竹田城は秀長の属将・桑山重晴に預けられました。さらに、天正13年（1585）、桑山重晴が紀伊和歌山城代に転じると、赤松広秀が城主となりました。

竹田城は、播磨・丹波・但馬の交通上の要地に築城されました。築城当初の姿は不明な点が多いが、石垣遺構周辺に存在する曲輪から判断しますと、現在の本丸・天守台の存在する山頂部から二方に延びる尾根上に曲輪を連続的に配置し、堀切や竪堀で防御性を高めていたものと思われます。

一方、織豊期以降の竹田城は、最高所の天守台（標高353.7m）をほぼ中心に置く石垣城郭となり、本丸以下南方には、南二の丸、南千畳が、北方には、二の丸、三の丸、北千畳を築いています。さらに、天守台の北西部には、花屋敷と称する曲輪があります。ここは、主郭の中でも搦め手の位置にあたるため、南北には、向かい合った石塁を築き、防御性を高めています。これらの石垣遺構周辺には、多くの石取場が確認されています。大竪堀や登り石垣なども確認され、倭城の築城形態に倣った作りとなっています。なお、竹田城の規模は、南北約400m、東西約100mを測り、今もなお当時の威容を誇っています。

固な塁線を構えて圧倒的な迫力がある。

⑥3の丸、2の丸、南2の丸、南千帖の折れ、張り出し部分は正面から攻め上がる敵を意識した大規模な横矢がかりになっている。石垣全景を望む絶景ポイントとしても見逃せない。

⑦2の丸は帯曲輪で本丸を一周している。

⑧頂上最高地は本丸石垣と天守台だが、昨年見学者が本丸虎口から転落して重症を負うという事故が発生したので、現在は立ち入り禁止になっている。

⑨石垣先端は危険防止のため簡単なロープが回されている。「天空の城」と喧伝されたことで一般行楽客が殺到、石垣一部が崩壊の危機に晒されているとされ、規制が一段と厳しくなった。

石材と積み方など

①石材は全山石山の自前、花崗岩系、固いが石目に沿って割りやすく角ばった石材が得られる。一部に矢穴がみられ慶長はじめ工事が行なわれていたことを示している。

②穴太積み＝別掲参照。安土城石積みに似る。打ち込みハギ。石材を粗加工、かい石を多用。

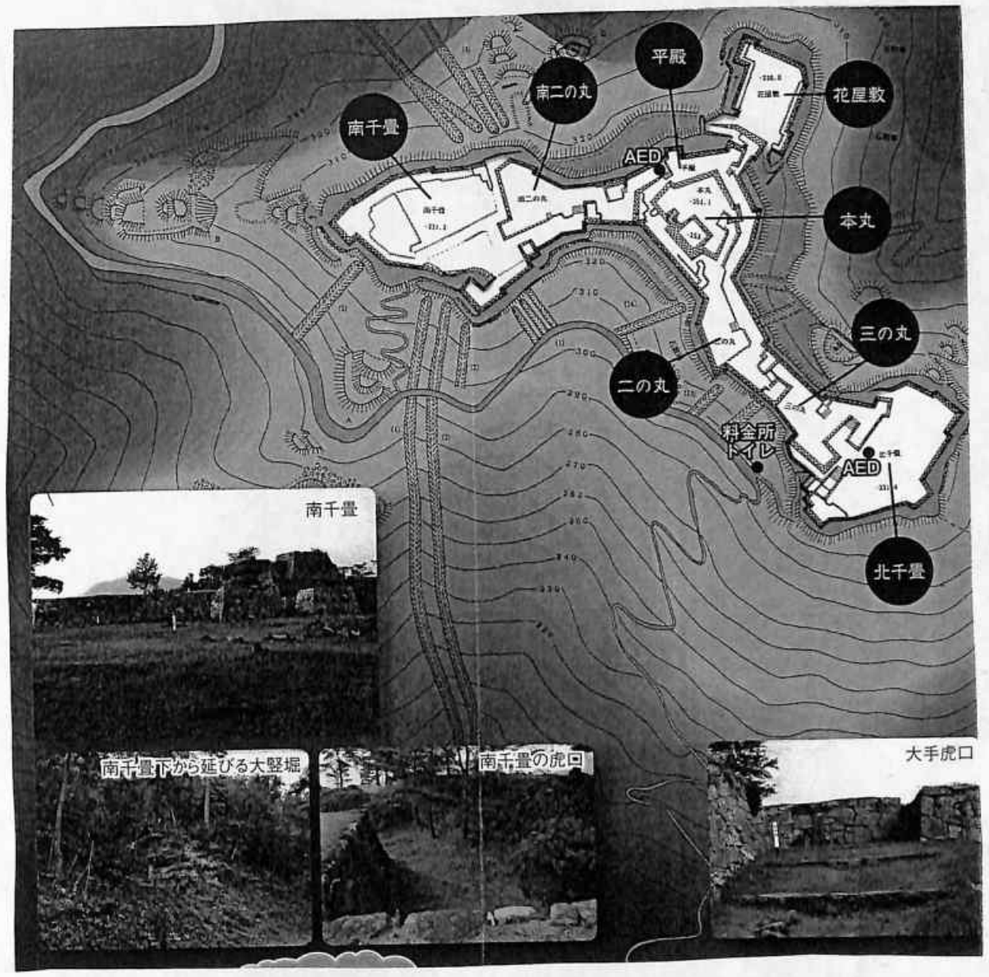
③コーナー「算木組」の初期段階＝別掲参照。角ばった大石を立て横こうごに積み上げている。

④天守台と天守跡、本丸御殿＝台は11×13m、礎石跡を検出。権威の象徴として見上げた。

⑤しゃち瓦、高麗瓦＝朝鮮の役に出陣した広秀が現地技術者を連れ帰ったと見られる。

以下現地でご案内したい。

以　上



穴太積み

竹田城の石垣は、安土城や姫路城と同じ「穴太（あのう）積み」で築かれています。穴太積みとは、大津市坂本町「穴太に住む「穴太衆」という人々が持つ石積み技法をいいます。

［穴太積み構築法］
大手正面槽台石垣

❶石垣隅角石（A・A'）にそって根石（捨全石）を配す。
❷Bの角石をおき①～⑦を配し、一方B'と⑦'～⑩'を順次配す。
❸以下C列C'列、D列D'列にそって石材を平行に配列する。

打ち込み

算木積み

算木積みとは、石垣の出角部分において、長方体の石の長辺と短辺を交互に重ねて積んでいく技法です。これにより、石垣の強度が増し、崩れにくくなります。

竹田城では、天守、本丸、北千畳など多くの場所で算木積みを確認することができます。

大阪城

鯱瓦

鯱（しゃち）瓦とは、頭が龍（もしくは虎）で体が魚という想像上の霊獣を模したもので、火伏せの霊験をもつとされています。

高麗瓦

高麗（こうらい）瓦とは、瓦の表面に、方形の十文字の花弁状や、同心円状の叩きを施しているもので朝鮮半島の造瓦技術です。

主要引用資料
山川詳説日本史図録（教科書副読本）
朝来市、和田山観光協会資料
日本名城100選ハンドブック
写真協力＝石井勇

城を歩く会「第９回研修会」メモ

2014年７月25日　保 科 隆 夫

「城」は何を守ろうとしたのか（６）
－姫路城の場合－

はじめに－平成の大修復

2014年６月、姫路城大天守の工事用の囲いが撤去された。壁面や木材などが劣化したことによる半世紀ぶりの本格的な修理。2009年に始まり、2015 年３月に完了する予定だ。塗り直した壁や、瓦の目地の漆喰（しっくい）で、大天守全体が白っぽく見え困惑と驚きの声が聞かれた。「真っ白だ」「白鷺城ならぬ白すぎ城だ」。しかし、これが本来の姿なのだ。姫路城は「白鷺（はくろ）城」という別称のとおり、白さが特徴の城なのである。

城の修復工事は姫路城だけでなく、江戸時代に建造された天守が現存する弘前城でも実施される。近年、天守下の石垣の傾きや膨らみ（はらみ）が指摘され、今年から本格的な修理が行われるのだ。天守の周囲の内堀を半分ほど埋め立てて、天守をジャッキで持ち上げ、敷設したレール上を約70メートル移動する。石垣を積み直し、天守を石垣上に戻す。完了間で約10年という大規模な修理である。

熊本城では1998年から櫓門や御殿、塀などを木造で復元させる作業が続いており、今後10年以上かかるという。

小田原城もコンクリート造りの天守を木造で復元する構想が進行中である。
また、東日本大震災によって大きな被害を受けた白河小峰城（福島県白河市）は、全長２キロに及ぶ石垣のうち10カ所で合計約160メートル、約7000 個の石が崩れた。天守など建物も一部損壊した。現在、石垣を積み直す作業中で2016年度に終える予定である。

名古屋城では、空襲で焼失した本丸御殿を木造で復元工事中。一部を公開しているが、2018年までに完成させる予定である。天守は太平洋戦争末期の1945年５月、空襲で焼失し、1959年に鉄筋コンクリート造りで再建されたが、河村たかし名古屋市長が木造で建て直す構想を打ち出している。

さらに、江戸城の天守は明暦の大火（1657年１月）で焼失して以来、再建されることはなかったが、2013年10月、大学教授らでつくる東京のNPO 法人「江戸城天守を再建する会」が、東京五輪の2020年竣工を目標として復元構想を発表した。
現存の天守台を活用して、５層、高さ60メートル、19階建てマンションに相当する巨塔を建設する計画だが、事業費は350億円が見込まれ、計画実現へのハードルはかなり高そうである。

３万とも４万ともいわれる日本の城であるが、城は地域の歴史と文化を背負ったシンボルである。建造当初の姿に近づけたいと考えるのは至って当然といえる。こらからも、本格的な修理や、木造での復元を目指す城は増えていくことだろう。

姫路城の歴史

最初の築城者は

姫山という小高い丘の上に白い天守のそびえる姫路城。いうまでもなく、近世の城郭史において最盛期の遺構である。現存の城は400年前に築かれたものだが、それ以前のこの城の始まりには２説がある。

一つは、鎌倉時代最末期、1333年(元弘３)、播磨の赤松則村が護良親王の令旨（りょうじ。親王らの下す文書）を奉じ、鎌倉幕府打倒の義兵を挙げて上洛の途中、この姫山に陣を構え支族の小寺頼季に守らせた。則村の次男貞則が1346年（貞和２）その縄張りの跡にはじめて城を築いたというもの。

一つは、戦国時代後期に姫路を治めていた黒田重孝・職隆（もとたか、官兵衛の父）父子が、1555年（天文24）から1561年（永禄４）に御着城の出城として築いたというもの。
現在は、後者の説が有力とされている（姫路市観光交流推進室）。

戦国期の姫路城について、司馬遼太郎氏は次のように描写している。粗末な城であったようだ。

「屋根なども藁や板などでふき、石垣もほとんど用いず、堀を掘った土を掻き上げて土塁にした程度の、いわば小屋同然といっていいほどに規模が小さかった」（『街道をゆく９』朝日新聞社）。

（註）**黒田家**：京極氏の流れといわれ近江国伊香郡黒田邑（現・木之本町）の発祥。1511年、備前国邑久郡福岡（現・長船町）に移る。「備前長姫」で知られた名刀の産地である。後世、黒田氏は筑前に封を得るが、その居城「福岡」は備前国福岡に因んだもの。官兵衛の祖父・重隆のとき赤松氏に属し、播磨国姫路に移り、1545年、小寺則職の家老として姫路城を預かる。姫路では家伝の目薬を売りさばいて財を成したとも伝えられる。

官兵衛と秀吉

1546年（天文15）、黒田官兵衛は姫路城で生まれた。御着城主の小寺氏の城代として姫路城を預かっていた黒田職隆（もとたか）を父に持ち、主家の小寺政職（まさもと）に才を認められて16歳で出仕。翌年には初陣を飾り、1567年、21歳で城代になった。

1577年（天正５）、織田信長の命を受け播磨平定に乗り込んだ羽柴秀吉のために官兵衛は優れた調略力を駆使して播磨の諸将を次々に織田方の味方につける。
秀吉と官兵衛は義兄弟の契りを交わしたが、臣従関係ではなくパートナーなのである（官兵衛は信長の家臣）。秀吉は生涯官兵衛を恐れていた、という見方が強くある。

「姫山という小さな丘に、官兵衛の居館がある。山の地形変化を利用してわずかに人工を加えただけの田舎城で、建造物も小さかったが、しかし二ノ丸の堀は深く、一ノ丸の塁は　高く、いかにも攻めるのに困難という実用的な城廓だった。（中略）石垣は用いられておらず、山の崖を利用しただけの塁である」（司馬遼太郎著『播磨灘物語』）。

1580年（天正８）、秀吉は官兵衛の「海陸交通の要衝である姫路城を本拠にしていただ

きたい」という勧めで姫路城に入る。実際、姫路は山陽道と山陰道とを結ぶ基点で、出雲街道・因幡街道・但馬街道が分岐している。

この間のことを『現代語訳・信長公記』の1580年（天正８の）欄にはきわめて簡潔に報告している。

「姫路は西国へ通じる街道の一拠点であり、また、敵の城にも近く、この二条件において要衝の地であった。そこで、秀吉は姫路に在城することを決め、城普請を命じた」

自らの城を差し出した官兵衛と、その城を受けとった秀吉の心境を、司馬氏は小説家の目で『播磨灘物語』に次のように述べている。

「異常なことといわなければならない。武将にとって城は自分の組織の肉体化したものというべきであり、敵が攻めてくればそれを死守するというのに、それをひとに遣るという。城を出た軍勢というのは、拠るべき場所を失うだけに、防御力においては放浪の集団にひとしい」

「（大変な男に出遭ってしまった）秀吉はおもわざるをえない。（小男だが、おどろいた肝だ）秀吉は、あきれるような思いがした」

司馬氏は、両者の心境をはかり兼ねているような筆遣いを見せているのだ。

秀吉は姫路城の拡幅工事を開始。翌天正９年に三重の本格的な天守を持つ平山城に造り替える。官兵衛は築城責任者に任ぜられたが、このとき、官兵衛が築いたとされる石垣が上山里下段などに現存している。秀吉は城下町づくりにも力を入れ、龍野町に楽座を開かせるなど町の発展に努めた。

姫路城を足掛かりに秀吉は官兵衛を従えて中国・毛利攻略を開始、備中高松城を水攻めにした途端、入ってきたのは信長の横死との情報であった。急遽毛利軍と和睦、姫路城を経由して上京、明智光秀を天王山で攻めた秀吉は天下をわがものにする。この間の策略も官兵衛の起案したものであった。

ミバリョウ太郎様ハリマナダ物語

（註） **黒田官兵衛孝高（よしたか）** ：1546～1604。播磨生まれの武将。はじめ小寺氏を称す。織田信長に反逆した荒木村重との戦いで有岡城に出向き、１年間入牢。足が不自由となる。秀吉の参謀格として各地に転戦。1587年、中津城主12万石となり、1589年家督を嫡男の黒田長政に譲り、如水と名乗る。関ヶ原の戦いでは徳川方に属する。キリシタン大名で洗礼名はシメオン。嫡子長政は筑前福岡藩52万石余を与えられ、黒田家はそのまま幕末に至った。

（註） **『信長公記』（しんちょうこうき）** ：織田信長の祐筆・太田牛一（和泉守資房。尾張出身の武士）が1600年前後に記した、信長の上京から本能寺の変まで半生の伝記）。

2013年10月、中川太古氏により現代語訳され、新人物文庫として発刊された。史的資料としてはもちろん、読み物としてもきわめて興味深く仕上げられている。太田牛一は７～８年前にヒットした小説『信長の柩』の主人公である。

池田輝政による連立式天守

池田輝政は、尾張出身の織田家の重臣・池田恒興（つねおき）の次男。父や兄とともに信長に仕え、数々の軍功を立てる。

信長の没後、秀吉側についた輝政は長久手の戦では先陣を務め、徳川方の井伊直政と戦っている。井伊氏は徳川の家中でも朱塗り具足（甲冑のこと）により「井伊の赤構え」と称される武勇抜群の家柄であった。

この戦で父兄が戦死、家督を相続した輝政は大垣藩主(13万石)・岐阜藩主(同)に任ぜられる。さらに1587年「羽柴」の称号を与えられ、翌年「豊臣氏」を賜っている。1590年、小田原北条氏征伐後に三河国吉田城に転じて15万2000石を領し、「吉田侍従」と呼ばれた。

1594年、秀吉の命により北条氏直の未亡人で家康の次女の督姫（ごうひめ）を継室に迎える。正室の中川清秀女とは離別していた。清秀女は利隆を産んでおり、これが輝政の後嗣となる。督姫は、輝政の子・忠継・忠雄ら５人の男子と２人の女子を産む。輝政は秀吉の信任厚い勇将の一人でありながら、こうして家康に取り込まれていく。

関ヶ原の戦い後、1600年（慶長５）、輝政は関ヶ原での功により三河吉田から52万石で姫路城主に大出世した。続いて備前32万石、淡路６万石を加増されて90万という大身代となるが、輝政とはどういう男だったのか。（このときの福島正則とのやりとりがある）

輝政は家康から豊臣恩顧の大名の多い西国を牽制せよとの命を受け、播磨６カ所（明石・高砂・龍野・三木・平福・赤穂）を整備して支城を置き、外周の守りを固める一方、姫山を中心に城と城下町の造営にも着手。城と城下町全体が外周を堀で囲まれた総構え式の縄張りを行った（総構えとは、町屋までも抱え込んだ防御体制のこと。総曲輪とも）。

普請奉行は池田家の家老伊木長門守忠繁、大工棟梁は桜井源兵衛である。工期８年。築城に携わった人員は延4000万～5000万人ほどであったと推定されている。

こうして1609年（慶長14）、大天守と三つの小天守を渡櫓で結ぶ、歴史上初の連立式天守をいただく姫路城が完成、今日の姫路城に近い姿が現れたのである。

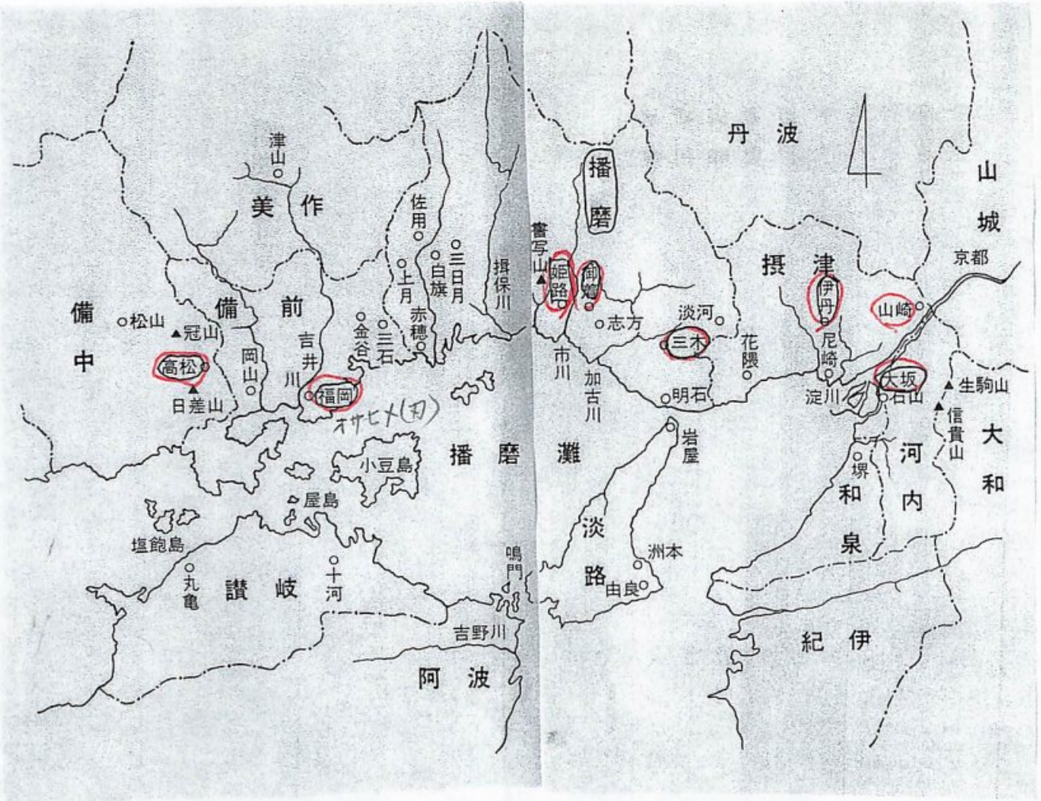
譜代・本多氏による総仕上げ

徳川幕府にとって外様大名である池田氏を、分離という形で体よく追い払った後（詳細後述）、1617年（元和３）姫路には徳川四天王の一人・本多忠勝の子・忠政（前・桑名藩主）が15万石で城主に就く（四天王とは、忠勝のほか酒井忠次・榊原政康・井伊直政）。

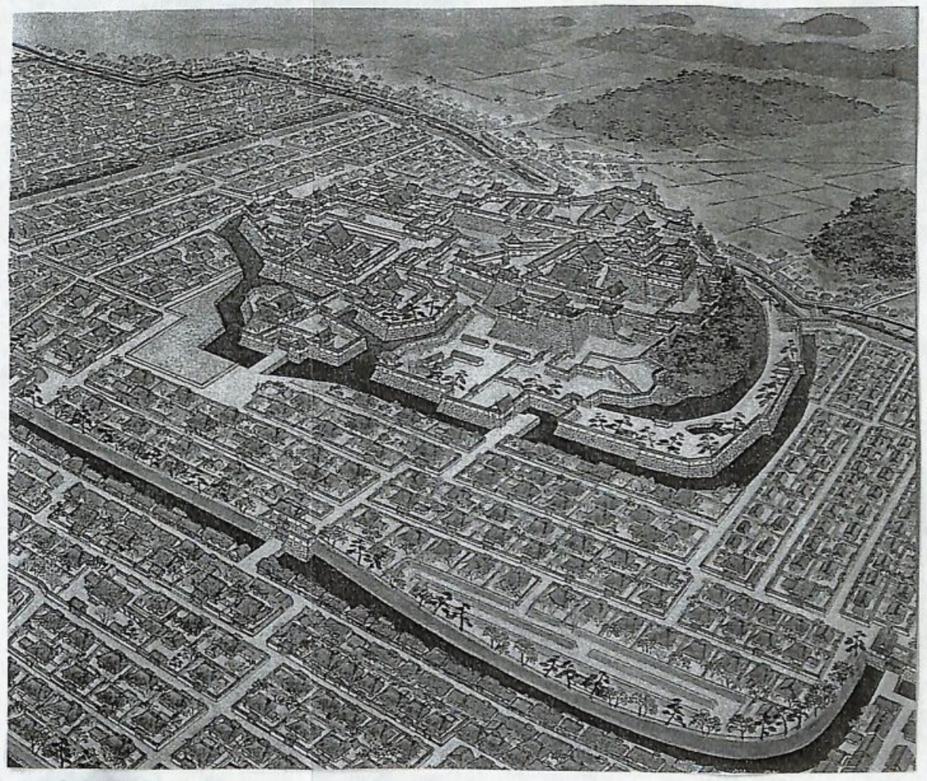
忠政は幕府の許可を得て翌年、鷺山（さぎやま）に石垣のかさ上げを行い、西の丸を造営。御殿・多聞櫓（現存）などを建設した。また、三の丸には御本城や向屋敷、千姫のために武蔵野御殿を建てるなど、総仕上げが行われた。

本多家の後、藩主は奥平松平家・越前松平家・榊原家・再度越前松平家・再度本多家・再度榊原家・再々度越前松平家と、譜代・ご家門が目まぐるしく入れ替わる。1749年（寛延２）、上野厩橋（前橋）から酒井氏が入城してようやく藩主家が安定した。

巨大な姫路城を維持していくのは15万石という石高では非常な重荷であり、譜代ゆえの幕府の要職とあいまって藩の経済をいちじるしく圧迫していたのだ。

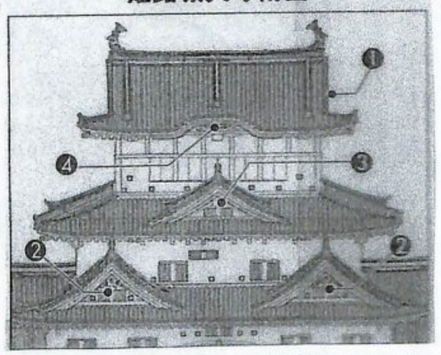


姫路周辺図

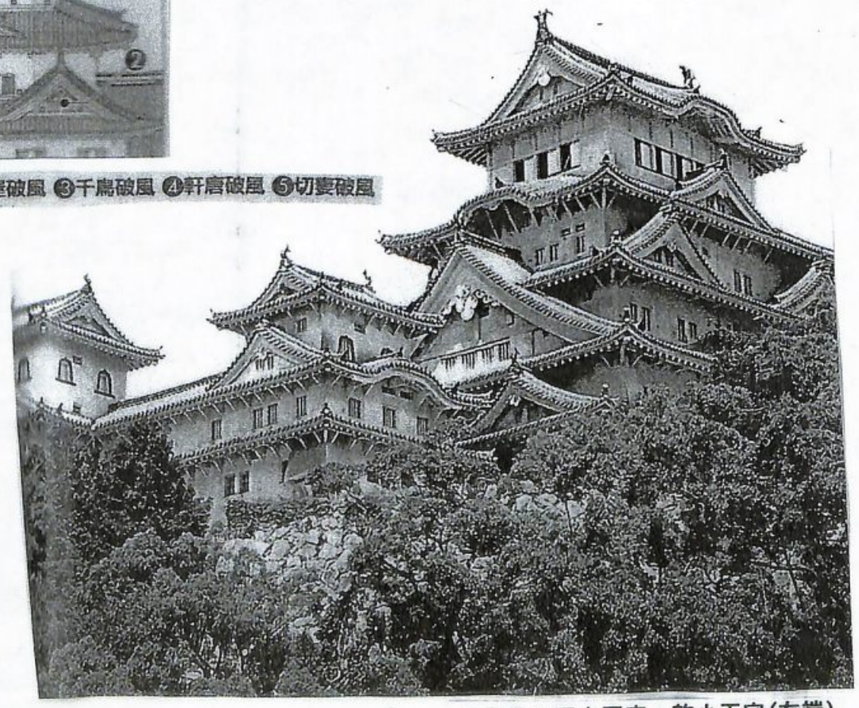


姫路城を俯瞰する

姫路城天守南面

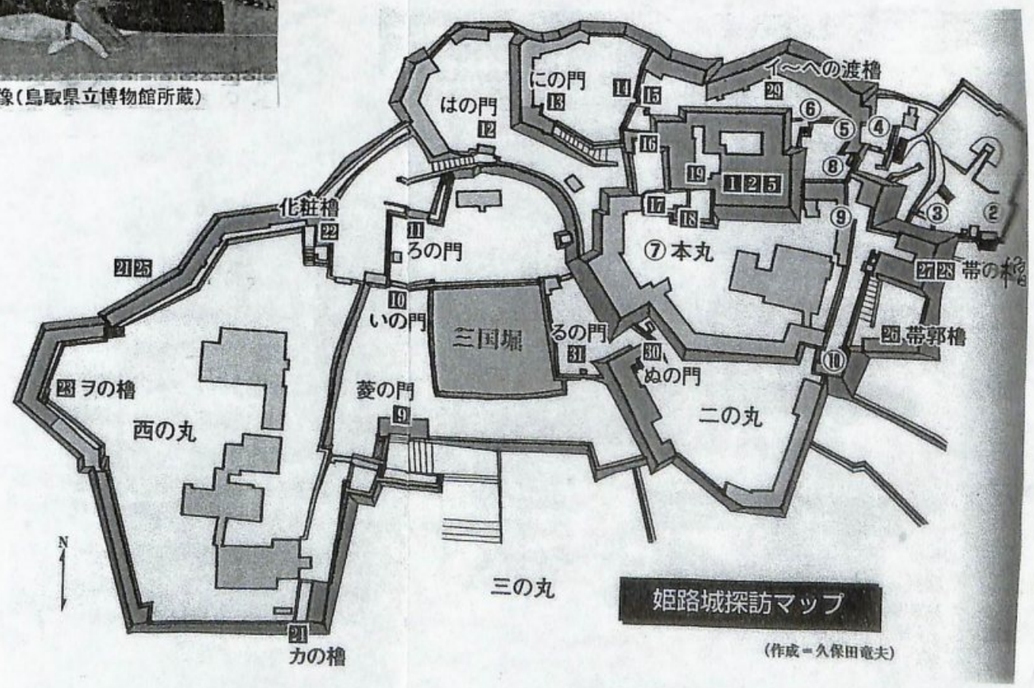


❶入母屋破風 ❷比翼入母屋破風 ❸千鳥破風 ❹軒唐破風 ❺切妻破風



大天守と西小天守・乾小天守(左端)

池田輝政像(鳥取県立博物館所蔵)



男の城から女性の城へ

督姫の場合

池田輝政が次々に加増を受け、ついに90万石という大身代となったのは、彼が家康の娘婿だったからである。

督姫（ごうひめ）は数え年９歳で小田原北条氏直に嫁がされて、16歳のとき北条氏が秀吉によって滅ぼされ、徳川家に帰っていた。政略のためとはいえ、むごい目にあわせたことを家康もあわれんだのであろう、輝政との縁を大切に思ったにちがいない。

督姫は輝政の子を７人生んだ。このことが督姫に悲劇をもたらした。姫路城主となって13年目の1613年、輝政が姫路で病死する。その翌翌年、彼女は、自分の子をいとおしむあまり、前妻の子・利隆を憎んで毒殺をはかったのだ（『吉備温故秘録』）。

兄弟そろって督姫の目通りに出たとき、前もってこらえていた毒饅頭を利隆に出した。かねて継母が自分に好意を持っていないことを利隆は知っていたにちがいない。饅頭に手を出さなかった。

督姫の長子・忠継は利隆に並んで座っていたが、母の悪計に気付いた。母に対して腹が立ち、兄に対してはすまないと思ったのであろう、手をのばして兄の前にあった饅頭を引き寄せ食べてしまった。督姫、今さらのように恥じたのであろうか、自分も毒饅頭を食べ、その日のうちになくなり、忠継もやがて死んだという。

忠継はこのとき17歳であった。身長５尺９寸の美男、前年の大坂冬の陣において士卒を指揮してよく働き、老巧の者も及ばないといわれたほどの人物であったというが、母親の盲愛の犠牲になったのである。

利隆は大坂落城の翌年1616年(元和２年)に死んで、あとは子の光政（８歳）が継いだが、幕府は池田家を分割させた。若年を口実に光政に32万石をあたえて因州鳥取に移し、兄への義理で死んだ忠継のあとを弟の忠雄に継がせ、これに31万石をあてがって備前岡山に移封したのである。

千姫の場合

千姫は２代将軍・徳川秀忠の長女、家康にとっては大切な孫である。

千姫も政略結婚の犠牲になった人だ。７歳で大坂城の豊臣秀頼に嫁した。彼女の母・お江（おごう）は秀頼の母・淀君の妹であるから、彼女と秀頼はいとこ同士である。徳川家としては、これをもって大坂方を油断させようと心づもりし、大坂方では人質にとったつもりだった。ところが、戦になった。

大坂落城の間際、家康は「城内に入って姫を救い出してくる者はいないか。救い出してきた者に姫をやるぞ」といったところ、坂崎出羽守（津和野３万石）という武将が飛び出していったという逸話が残っている。（別途説明）

大坂城から救い出された千姫は、淀城を経て江戸に送り返される途中、桑名藩（藩主・本多忠勝の子・忠政）を通過した。千姫は忠政の子・平八郎忠刻（ただとき）を見染めてしまう。忠刻、国宝になっている尾張屏風のモデルに選ばれるような美青年で当時20歳、

千姫より１歳年上であった。

幕府は、前述のとおり姫路の池田家を二つに分けて鳥取と岡山に移らせ、桑名の本多に５万石加増して姫路に入れる。さらに、10万石の化粧料をつけて千姫を本多家に嫁がせるのだ（この経緯、すべて坂崎出雲守は知っていた）。

本多忠政が姫路城に西の丸を築いて武蔵野御殿や化粧櫓などを建てたのは、千姫を迎え入れるためであった。

ところが、平八郎忠刻は部屋住み（家督を相続しない身分）のまま30歳で病死する。千姫は再び未亡人となって落飾し、天樹院と号して江戸城内の竹橋御殿に入り、70歳の長寿を保つのである。

高尾大夫の場合

再度姫路城に入部した榊原氏だが、その３代目政岑（まさみね）、20歳で榊原家を継いだ。江戸吉原で豪遊、名妓として評判の三浦屋第11代高尾大夫（大夫とは、官許の遊郭で最高位の遊女の称）を溺愛し、1741年、1800両で身請けしてしまった。3000両を出して吉原の遊女を総揚げして引き祝い（芸人などの引退や廃業のときの披露の祝い）を行ったり、高尾を住まわせるため池の端の中屋敷（現・岩崎邸）を改造したり、大騒ぎだった。

間もなく政岑は姫路に帰国、高尾を連れていった。千姫御殿に住まわせて「西の方」と呼ばせる。大名にあるまじき振るまいであるとして幕府から隠居を命じられ、さらに姫路から越後高田に移され、ここにも高尾を同道したが、政岑は30歳で死んでいる。

高尾にしてみれば、針のムシロにいるような思いだったにちがいない。尼になって江戸へ戻り、その後も高尾は榊原家を離れず、1789年、同家で死ぬ。墓は榊原家の菩提寺、江戸雑司ケ谷の本立寺（ほんりゅうじ）にある。高尾の戒名は「蓮昌院殿清心妙華日持法尼」である。

化粧櫓（右側手前）につづく渡櫓